

「ツカレナオシ」

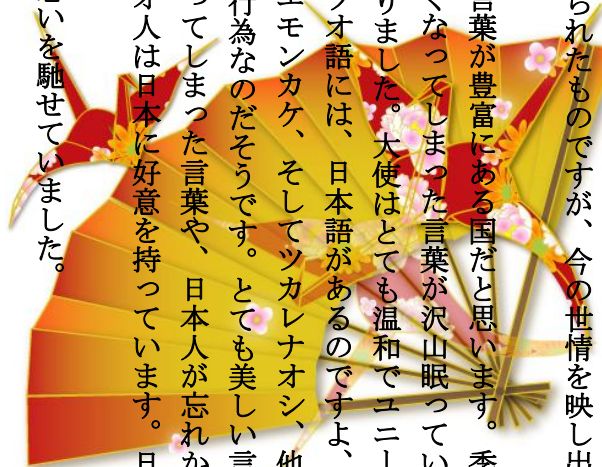


新年あけましておめでとうございます。本年も変わらぬご愛顧のほど、宜しくお願い申し上げます。
私は仕事や所属団体で海外へ出ることが時折ありますが、そこで立ち回るのは「言葉の壁」世界において公用語は英語ですが、お恥ずかしながら英会話は本当にダメで、日常の挨拶や単語の羅列、あとは身振り手振りで相手の理解力に頼り、辛うじてコミュニケーションを図っている状態です。学生時代、苦手な英語から逃げ回っていたツケがいまになって回ってきたと後悔することしきりです。

しかし同じ日本人でも言葉の壁を感じることがあります。それは俗に言う「若者言葉」です。電車の中などで彼らの会話を耳にすることがありますが、理解不能な言葉が飛び交い、一体何語なのだろう？と首をひねることがあります。（もともと私より上の世代の方たちからしたら、同じように感じられているかもしれません・・・）「言葉の乱れは心の乱れだ」とよく母から叱られたものですが、今の世情を映し出しているかもしれませんね。

日本は恐らく世界でも類を見ない、微妙なニュアンスを伝える言葉が豊富にある国だと思います。季節の移ろいや思いを伝える言葉、色の表現など、現代では使われなくなってしまった言葉が沢山眠っているのです。ある機会があり、パラオ大使にお会いすることがありました。大使はとても温和でユニークな方で、お父様が日本人の日系2世です。大使との会食中に「パラオ語には、日本語があるのですよ、ダイジョウブ、センキョ、ベントウ、サルマタ、チチバンド（笑）エモンカケ、そしてツカレナオシ、他にもたくさんあります。」最後のツカレナオシはパラオでお酒を飲む行為なのだそう。とても美しい言葉だと思いませんか？どうやらパラオには日本ではすでに死語になってしまった言葉や、日本人が忘れかけている「心」が脈々と受け継がれているようです。大使は「パラオ人は日本に好意を持っています。日本が統治していた時代が良かったからです。」

大使のお話を聞きながら、私の心はずでに、まだ見ぬパラオに思いを馳せていました。

日本の野鳥シリーズ
イヌワシの風格

技術営業部 佐藤 弘

イヌワシの研究者由井正敏氏によれば、岩手県に本種が多く棲息する理由は岩手が自然豊かな地域であると共に、かれらが狩りに使う牧場が山中に多い事だという。また他の研究者は、倒木で空いた僅かな空間での狩りを観察したという。そのデンをいく私見だが、山深く延びる林道をヘビがのたくったり、オフのスキー場ゲレンデをノウサギがウロついたら、これは絶好の狩場になるだろうと思う。翼を大切に作る猛禽は、けがを恐れて林の中ではまず狩りをしないことは前に述べた。

はるか上空を飛ぶシルエットのワシ・タカを識別するには、外形によるしかない。本種は畳一枚と呼ばれる大きさが特徴で、広げた翼は畳より長い 2~2.2mあるという。それが上昇気流に乗って全く羽ばたかず、空中に浮かぶ様子はなかなかの見ごたえであり「コンドルは飛んでいく」のメロディーが空耳で聞こえそうな雰囲気だ。これ迄に一度だけ本種を観た、21年前の尾瀬ヶ原の青い空を思い出す。

この秋、情報を得てタカの渡りを観に行った山で、先導する私はサルの群をはねない様に気をとられていたが、後続車の仲間がペアで舞う本種をしっかりと撮影した。思わぬ近場で稀少種が観られることに驚いた。でも、他人様の大事な穴場を勝手に明かす訳にはいかない。それに今やネットで繋がっているから、何をしかか分からない人たちが押し寄せる心配がある。田んぼが背景のトキでは「絵にならない」と石を投げて飛立たせるわ、ワシが来たと知るや、車にはねられたタヌキを冷凍しておいたものを、撮影に都合のよい所に置いてワシをおびき寄せるわ…。国宝なみの鳥に対して「法令に引っ掛からないことはやってよい」とばかりに、やりたい放題の人たちには場所を知られたくない。

雪道をゆっくり走る私の車を、スズメとそれを追うチョウゲンボウが追い越した。辺りは身を隠すものがない一面の雪野原であり、スズメはスタミナ切れ必至だ。だが、スズメは1列に並んだ作物支柱の1本の根元にうずくまり、棒を盾にした。突っ込めるものなら来てみろ、という構えだ。チョウゲンボウは数秒ほど停空飛翔（ホバリング）した後、飛び去った。パニックことなく、「敵を知り己を知れば…」孫子の兵法を地で行ったスズメの勝ちだ。そして、何の事はない近くの電柱で待てばよいのに、簡単に諦めたそのタカには先を読む能力がないと知った。



“正月の過ごし方”

生産部部长 山本知男

このDMが届く頃は新年を迎えられているところでしょうか。酒蔵のみなさんにとってはお正月よりも大事な仕込み時期なので気も抜けない時と思いますが、我々にはちょっとめでたく新たな気分になってる所です。(急な修理が無ければですが(^^))

最近の正月休みは結構長いので旅行する人もいるかも知れませんが、大体は大掃除して大晦日、正月と呑み続けると言うのが定番ではないでしょうか。私もそのパターンで大晦日の夜は各種お酒を脇に置いてレコード大賞を見て紅白歌合戦を見てフラフラしながら二年参りに行くと言うのが例年です。常日頃うるさいママさんも、この時ばかりはちょっと苦笑いしながらも大目に見てくれてるようです。(それでも私の目を盗んでは酒瓶を隠してるようですが・・・)

でもこの大晦日で歌番組ばかり見ていると、正月番組も飽きてしまいますよね。

どのチャンネルにしてもお笑い、バラエティで歌が放映されていて、昼間はスポーツもあるけど夜はほとんど同じで本当に飽きてしまいます。(テレビ見なければそれで良いんでしょうが)そこで飽きた私なんかはここ何年かはコンサート番組を見ている。特に正月の夜 7 時～NHKでやってるウィーンフィルのニューイヤーコンサートが一番のお気に入りです。これを見ながら日本酒を頂くのが至福の一時になります。私の感覚では JAZZ にはウィスキー、POPS にはビール、クラシックにはワイン、演歌には日本酒が合うと独断で思っていますが、このニューイヤーコンサートは日本酒、特に燗酒が合うように思います。シュトラウスのウィンナワルツを聴きながら、ぬる燗を頂きアンコールの美しく青きドナウ、ラディッキーを聴く辺りでは最高潮となり祝杯を掲げる・・・、その最高の時に「あなた呑み過ぎ!!」って言う声も最高潮になって「まあ良いじゃないか、正月なんだから」って事で乗り切ろうとするんだけど、さすがに呑み過ぎてから、ママさんの制止の手の方が早い。「そんなに呑みたけりゃ、ウィーンに連れてって生の演奏聴かせてよ!」ってな事を言われて「ん～、いつになるかな～」お正月の歌番組に飽きた皆さん、今度ぜひお試しあれ。皆さまに良い年となりますように。

◆ ちょっと豆知識 ◆ その15

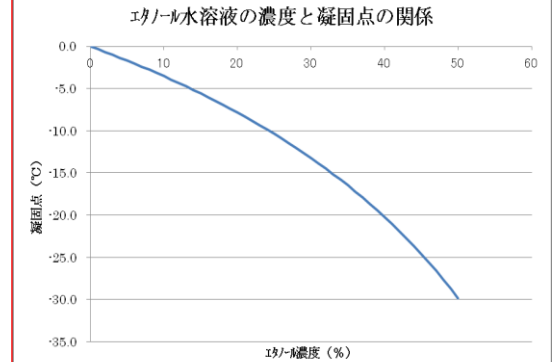
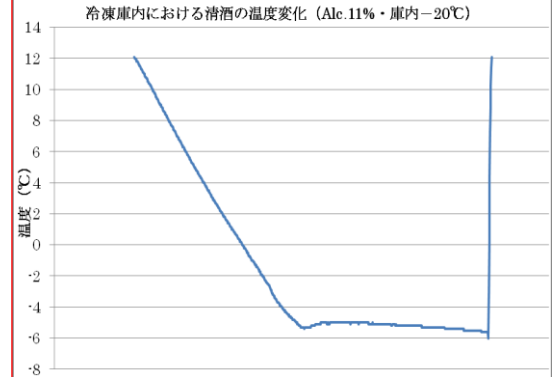
アルコール飲料の凍結温度

技術営業部 課長 成田 護 (mamoru@shinyo.co.jp)

突然ですが、アルコール飲料の凍結温度(凝固点)って何℃くらいなのでしょう?私が酒屋に居た頃は「アルコール度数に『-』付けた温度」なんて乱暴なことを言われてたもんですが…。過去に当社で調べた事例をご紹介します。

市販清酒の Alc.濃度を適宜調製した試料をガラス容器に移し、温度センサーを沈めてラップ、家庭用冷蔵庫の冷凍庫に置いて温度変化のデータを採りました。その時のグラフが右上図です(Alc.11%・庫内-20℃)。直線的に温度が下がっていき、あるところで温度の降下が止まりました。凍る瞬間をジッと見ている訳にはいきませんので、「清酒の凝固点はここ」とは指し示せませんが、化学の授業で聞いた原理・原則に従うと、この温度が「ほぼ凝固点」ということになりそうかと思います。「アルコール度数÷2に『-』付けた温度」と言えそうです。実際、他の濃度でもそうでした。

右下図は、水を溶媒、エタノールを溶質として計算したモル凝固点降下のデータから算出した、Alc.濃度と凝固点の関係で(あるてんハドブックより成田作成)、同様の結果を示しました。意外と高い温度でお酒って凍るんですね。



そうだ渋谷行こう



生産部主任 島貴 修一

3月16日に東急東横線と東京メトロ副都心線の相互乗入れ運転が始まる。それがどうした何の関係があるのかというと、東急渋谷駅が渋谷ヒカリエの地下に移るので、現在の駅舎が廃止になり解体されてしまうということ。あの思い出の駅舎が無くなってしまう。

川崎市の高津区と中原区の境目にある会社の寮で、都会暮らしを楽しんでいた頃のこと。週末になれば武蔵小杉駅から東横線のアオガエルに乗り目指すは東急渋谷駅。電車を降りて頭端式ホームを歩いた先にある改札口は東京に入る玄関みたいなもの。この玄関を通過して新宿にも銀座にも秋葉原にもアメ横にも晴海のモーターショーにも行った。六本木と麻布は渋谷の二駅手前の中目黒で地下鉄日比谷線に乗り換えていたが、外国人が多く多国籍な雰囲気が入り込んで散策を楽しんでいた。また渋谷の大盛堂書店も専門書(化学屋です)を探しによく通った所。その後も川崎や東京(大田区)に出張した時も東急渋谷駅を利用しており、東京と言えば渋谷、渋谷と言えば東急渋谷駅という構図が頭の中に出てしまっていた。そんな思い出深い駅舎をもう見ることも利用することもできなくなってしまった。

そうだ渋谷行こう。今の内に写真に収めておこう。鉄道ファンではないが駅舎の内外や電車は被写体として魅力があるし、ゆるやかにカーブした4線が入る頭端式ホームは他の駅とは異なる趣きがある。ついでに六本木と麻布もぶらぶら歩いてみたい。久しぶりだなあ。